

「今、私の晴雨計は！④」

「シルクロードの夢は

半ばで……」①

平山征夫

前回、朱鷺国際フォーラムでの

私の基調報告を書いた。中国政府からの朱鷺の貰い受けは、「重要外交事項なので政府・環境庁が行うから県は動かないください」と言われていたので、裏で動いたこの話はずっと表に出せないできた。基調報告の原稿を書きながら、当時くじけそうになる自分を元気づけるため、時折使っていた駄洒落を思い出した。それは、「皆さん、朱鷺の鳴き声を知っていますか？」というもので、皆がシーンとしていると「では、私が今か

らやってみます」と言って元気よく「エイエイオー」（関の声！）……。余りのくだらなさに場は白けるが私には元気づけの掛け声だった。

国際フォーラムから二週間ち

よつとで再度中国に出掛けた。今度は現役引退記念としての旅行だ。往年の名番組・NHKの「シルクロード」を見ていずれ訪ねてみたいと思っていた私は、ここ三年でウズベキスタン、河西回廊と旅し、いよいよその中心の天山山脈とタクラマカン砂漠に代表される「西域」。今では「新疆・ウイグル」と言われる地域を旅行するため出掛けた。この地域の玄関は新疆ウイグル自治区の首都ウルムチだが、成田

から上海・蘭州と乗り継ぎ深夜ようやく到着したこの街は、翌日、朝の光の中で見ると高層ビル林立する他の中国の大都市と同じ近代都市のたたずまいだった。帰路再度寄ることもあって、「楼蘭美女」のミイラで有名な博物館

など市内観光を済ませて昼過ぎのフライトで一挙にカシュガルに飛んだ。キルギスに最も近い中国の最西の中心都市で、「玉の集まる所」というその由来のように、古くから中国と中央アジアを結ぶ要衝の街だ。ここでは「アパク・ホジャ」と呼ばれる香妃墓とイスラム教モスク「エティガール」を見物した。このモスクは新疆地区最大のことであるが、既にサマルカンドなどで巨大モスクを見

た私には特段の感慨はなかった。むしろその後散策した「職人街」が面白かった。金属製品、家具、楽器、装飾品、木工細工、壺など食器等種々生活関連商品を職人が製作しながら店頭に並べているのだが、路上で小さな子供たちが遊んでいたり、学校帰りの大い子供たちも行き交い街は活気に溢れている。昔ながらの小路があって生活感一杯だ。穏やかな表情をした年配女性に出会ったので頼んで写真を撮らせて貰った。

しかし、シルクロードを思わせるこうした街の風景にそぐわない人たちと何度かすれ違った。揃いのチョッキを着て野球のバットよりひとまわり太い「鬼の金棒」のような丸太ん棒を抱えた人た

ちが4〜5人グループで街を歩いている。聴けば地域の警察活動を支援する市民グループだという。私の乏しい事前知識でも二〇〇九年のウルムチでのウイグル騒乱事件、二〇一三年の天安門広場へのウイグル人による車の自爆突入事件などを受けて、中国政府がかなり厳しい監視・取締りを行っていることは承知していたが、こんな市民活動があるとは思わなかった。思わず「それにしてこの丸太ん棒は酷いなあ。文革の時の紅衛兵みたいにならなきゃ良いが！」と内心叫んだ。この後の旅行中、ウイグル人に対する中国政府の想像以上の厳しい対応ぶりを目にするようになる。

トランでの夕食を終えて21時過ぎに外に出たがまだ夕方の明るさだ。勿論、日本より北に位置していることもあるが、最大の原因は西にあるにもかかわらず北京時間で表示しているからだ。二時間遅れのウイグル時間もあるが北京時間が優先されているようだ。ウイグル時間で見ると暗くなるのは夜八時頃だ。街は長い夏の宵を遅くまで楽しんでいた。翌日、カシュガルからパキスタンに抜けるカラコルムハイウェイで二〇〇km離れた「パミール高原の真珠」と言われるカラクリ湖に向かった。この地域全体に特有の背の高いポプラ並木を抜け、ウバル村というところでトイレ休憩、「すいませんが有料ですので

一元払ってください」とのガイドさんの案内に思わず「これが本当の一見の客だ」と駄洒落が出る。快調だったのはこの辺まで、遠くに雪山が見え、近くに鉄分を含む赤い山が見え風景は楽しめるのだが、何せ車が遅い。ガイドさんによるとこのハイウェイは普通車60km、バスなど大型車40kmの速度制限が課せられているのだ。理由を聞いても「自治区の偉い人が決めたことで分らない」とのこと。結局二〇〇kmのカラクリ湖までこの途中からの速度制限と三回の検問で時間を費やし五時間かかった。カラクリ湖とその手前にあるブロン湖はそれだけの時間をかけても十分行く価値のある景色を見せてくれたが……。

カラクリ湖のある地点は標高三六〇〇mとかなり高いが、その湖面に雪を頂いたコングール峰とムズターク・アタ山という七七〇〇m級の山々が映る景色は神秘的だ。キルギス族のゲルでの昼食は簡単なチャーハンのようなものだったが旨かった。往きは良いとはいかなかったが帰りはもっと酷かった。ひたすら同じ道に戻るのだが、速度規制と検問に加えて二度、要人一行の車の隊列通過に30分くらいずつ待機させられた。正直、検問態度は日本人観光客だろうがウイグル人に対するのと大きな違いはなく、極めて横柄で不愉快だが我慢するしかない。我慢できないトイレの方は待機中青空トイレで済ませた

が、一見の客より安くできてきれいだ。不思議だったのは検問のやり方、厳しさは検問所によって全くまちまちなことだった。

翌日、カシュガルからホータンまで五二〇kmを12時間半ひた走った。苦勞なことに途中の村への外国人の立ち入りは認められていないため、村に入らないよう公安車がべったり張り付いて先導していた。この日の検問は合計五か所、我々の会話に「中国検問の旅」というフレーズが登場した。次の日はホータン観光だが、ラクダに乗っての砂漠逍遙と白玉河の河原での白玉捜し、絨毯工場見物という公式日程より夕方フリーの時間にガイドさんが案内してくれた商店街散策が面白かつ

た。大きな本屋の新刊本の立体的に本を積み上げたディスプレイには感心させられたが、買った本がレジで半額と言われて確かめると、店の半分は中古本コーナーだった。大きな道路の下を横断するように地下商店街が発達していた。スマホの店や飲食店など大賑わいだったが、地上が上がって来ると砂嵐がはじまっていた。慌ててホテルに戻った。昼間は風がなかったのが、一日地上が熱しられて蒸気が夕方になると風を惹き起こすもので、毎日この時間に砂嵐が発生するそう。この地域で一番恐ろしいのは本格的な砂嵐だ。

寝ていてもベットのの上にも砂が降ってくるそうだ。現にホテルの部屋の分厚いカーテンを開けるとびっしり閉まった窓の内側の棧にはかなり厚く細かい砂が堆積していた。オアシス都市と言ってもここは砂漠の中なのだ。

(平成30年7月25日)